2011. January 冬 vol. 3

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

1 第４回現地勉強会 明科地域の古墳を巡る……講師：大澤慶哲氏
2 第１回『あずみ・しか』ゆかりの全国ネットワーク全国集会 夏と秋…ふたつのゆかりの地との交流会／「安曇族サミット」への勧誘
3 第一回交流会に感じたこと …… 平瀬孝子 「金印シンポジウムin志賀島」に参加して …… 津留芳子
4 安曇氏が辿った道は東海ルートか、日本海ルートか … 金井恂 安曇野こぼれ話 ―③ 海から来た安曇族 …… 細川修
5 明科地域の遺跡・古墳の現地見学会に参加して …… 千国寛一 明科フィールドワーク …… 鈴岡潤一
6 砂鉄を求めて安曇野へ ― ① シナノは鉄の先進地だった … 小穴岳夫
7 安曇の歴史と穂高神社 ―② …… 山崎佐喜治
8 編集後記「歴史を学ぶことについて」…… 本郷敏行 information 臨時総会開催／事務局だより

発行：安曇誕生の系譜を探る会　〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛1078-1 Tel.0263-77-2803　発行責任者：金井恂　編集委員長：本郷敏行

▲穂高神社本宮御船祭

第４回 現地勉強会　明科地域の遺跡・古墳 平成22年9月19日 …… 講師：大澤 慶哲 氏

明科は松本平の北部である安曇野の東北隅に位置し、標高は530mと最も低く松本平を流れる水（南から梓川、奈良井川、北から高瀬川、西から穂高川）がすべて集り、善光寺平に向けて峡谷地形をつくりながら流れ下ります。流域には河岸段丘がよく発達していて、段丘上は縄文時代から現代に至るまで人々の生活の場として利用されており、右岸には北村遺跡、上手屋敷遺跡、明科廃寺、龍門渕遺跡、こや城遺跡、潮神明宮遺跡、上生野遺跡など多くの遺跡が存在しています。段丘東側には、松本市城山から続く筑摩山地の一角である長峰丘陵、会田川を隔てて続く雷山が迫り、段丘は第三紀層の砂岩・泥岩からなる山地からの崩落土が厚く堆積しており、赤茶色の粘土に覆われた段丘地形が明科の名の起こりともいわれています。

一方、段丘の左岸は三川合流の押野岬から下流には、大峰丘陵の比較的なだらかな丘陵地帯が連なり、古代から利用が進んでいて山間地まで集落が見られます。丘陵の東側段丘上には右岸同様みどりヶ丘遺跡、荒井遺跡、桜坂、宮原古窯址、ほうろく屋敷遺跡などの多くの遺跡が存在しています。

①弥生時代の主な遺跡
　中期：みどりヶ丘遺跡、荒井遺跡、ほうろく屋敷遺跡
　後期：北村遺跡、龍門渕遺跡、こや城遺跡、みどりヶ丘遺跡、ほうろく屋敷遺跡
　弥生時代の遺跡の主な遺構・遺物
　　みどりヶ丘遺跡：中期初頭の集石遺構（土器類、石器類）
　　ほうろく屋敷遺跡：中期初頭の再葬墓 4群16基（土器、石器、後期住居址１軒）

②古墳時代の主な遺跡
　前期：潮神明宮前遺跡、上生野遺跡
　中期：栄町遺跡、竜門渕遺跡、潮橋ノ爪遺跡
　後期：北村遺跡、上手屋敷遺跡、栄町遺跡、潮神明宮前遺跡、潮橋ノ爪遺跡、宮原遺跡、明科廃寺、桜坂古窯址
　古墳時代の遺跡の主な遺構・遺物
　　上生野遺跡：3世紀末から4世紀初頭住居跡2軒（土器、石器）
　　潮神明宮前遺跡：古墳時代4世紀頃の竪穴住居址3軒（1700年前）7世紀末から8世紀初頭の墓壙2基
　　上手屋敷遺跡：7世紀末から8世紀初頭掘建て建物1棟（建物1棟4間以上×3間以上）

③古墳　6 世紀：能念寺古墳
　　7 世紀：上郷古墳、武士平古墳、潮古墳群
　潮神明宮前遺跡（潮古墳群）：7世紀後半から8世紀初頭（1300年前）の古墳3基、古墳周溝から祭祀用須恵器（長頸壺類、提瓶、平瓶、杯、杯蓋、高杯など）石室から玉、金冠、鉄器、人骨など

④廃寺址　明科廃寺：掘建て建物2棟（丸い柱穴の建物1棟5or4間×2or3間、四角の柱穴の建物1棟5間以上×2or3間）
　布掘りの基礎を持つ掘立て建物1軒建物の基礎1棟
　遺物　建物の屋根に使われた瓦（平瓦、丸瓦）多数（このうち軒丸瓦10点、軒平瓦1点）瓦塔片8片

⑤古窯址　桜坂古窯址：竪穴式住居７世紀後半から８世紀初頭頃３軒　灰原（窯跡の灰、不良品捨て場）2 ヶ所
　遺物：平瓦、丸瓦、軒丸瓦、軒平瓦、須恵器製の鴟尾、硯、須恵器（甕・坏蓋坏・高坏・壺類・横瓶など）土師器

第1回『あずみ・しか』ゆかりの全国ネットワーク全国集会（古代海人サミット）へ20名参加

第4回金印シンポジウムin志賀島は平成22年10月10日志賀島小学校で開かれました。今回はテーマを「金印と古代海人阿曇族」として金印の秘める謎と海人・阿曇族の実体解明に挑みました。基調講演は「西海の海神祭祀と海民文化」（対馬歴史研究家：永留久恵氏）「漢委奴国王」金印の読み方（西南学院大教授：高倉洋彰氏）が行われました。続いて行われたパネルディスカッションは「古代海人の活躍・阿曇族の全国進出」をテーマに全国４ヶ所の代表の発表がありました。当会は、金井恂会長が「安曇族の謎そして栄光と挫折」と題して自説を語りました。全国集会は６県７団体が参加して開かれ、各地の活動報告が行われました。その後全国ネット参加の確認、大会宣言が読み上げられました。次回は、安曇野市が開催地となり歓迎表明が行われました。

夏と秋…ふたつのゆかりの地との交流会

〈第１回 安曇族ゆかりの地との交流会〉

「安曇誕生の系譜を探る会」が計画していた、滋賀県高島市安曇川と愛知県田原市（渥美）の皆さんとの交流が平成22年7月24日（土）25日（日）に開催された。

とにかく暑かった今年の夏。なかでも酷暑の２日間、10名の皆さんにお運びいただいて「安曇族のなぞ＝いつ・どこから・なぜ…」をテーマに24日のシンポジウム、懇親会。25日の安曇野見学（国営アルプスあづみの公園）を予定通り行った。24日13:00「早春賦愛唱会」の皆さんの合唱でスタート。宮澤宗弘安曇野市長・望月雄内県議会議員の来賓あいさつの後、パネラー６名によるパネルディスカッションが16:00まで行われ、夜の懇親会へと移った。翌日、国営あるぷすあづみの公園に集合。古幡達雄氏のご指導で公園内の古い縦せぎ筋と古墳を見学、昼食後解散した。ゆかりの地の皆さんには、厳しい陽気のなか遠路をお運びいただいて貴重な心のふれあいをいただいたものの、われわれの会としては初めての催しでもあり、試行錯誤の連続であった。今後」更に拡充をめざして努力していきたいものだ。

〈第４回 金印シンポジウム in 志賀島〉

平成22年10月9日（土）10日（日）の２日間、福岡市東区志賀島で行われたこの会に、会員・市役所・穂高神社・マスコミなど総員21名で参加した。安曇野市長からは親書をいただいて、福岡市長らを表敬訪問・全国交流会で披露された。早朝6時に安曇野を発ち、JR・新幹線で7時間余。福岡市博物館で金印などを見学させてもらって、渡船で島へ。午後３時。そぼ降る小雨模様の日だったが、海は凪いでいた。一日目は「古代海人サミット」と銘打った第１回全国交流パーティー。６県からの約100人が、ゆかりの地の情報を交換し、来秋の第２回目は安曇野市で開催されることが決定した。

10日は、基調講演とシンポジウム。「古代海人の活躍―安曇族の全国進出」をテーマとして、活溌に行われた。その後夕刻、志賀海神社に参拝。祖神を崇敬した。なお、ゆかりの地特産品販売のため、りんご・生そば・わさび・にじます甘露煮・菜種油などを持参し、大好評。たちまちの売り尽くしであった。

〈このふたつの交流会の詳細は、事務局の「報告書」「レジュメ「志賀島だより」などにありますので、ご覧ください。ご尊慮をいただきました皆様にあつく御礼申し上げ、今後ともよろしくご指導のほどお願い申し上げます。〉

（細川修・交流会実行委員長）

「安曇族サミット」への勧誘

平成22年10月9日午後4時半から休暇村志賀島で開かれた第1回『あずみ・しか』ゆかりの全国ネットワーク全国集会（古代海人サミット）で第２回全国集会を安曇野市で開催することが確認され、本会を代表して松尾宏さんが次のような歓迎の挨拶を行いました。次回は安曇族サミットと呼ぶことになります。

「安曇誕生の系譜を探る会」は安曇族のルーツに関心を持って「安曇族のなぞ：いつ・どこから・なぜ…」を統一のテーマに安曇ゆかりの地との交流を、第１回として昨年７月に愛知県渥美、滋賀県安曇川の皆さんにおいでいただき、第２回は本年２月には福岡県志賀島などの皆さんとの交流を予定しております。さて今回の「古代海人サミット」に続いて本年秋に長野県安曇野市を中心に、第２回大会を開く予定を計画しています。日程や大会の内容につきましては、ただいま検討中であります。日程につきましては、穂高神社例大祭（平成23年9月26・27日）と本年4月から始まりますNHKの朝の連続ドラマ「おひさま」の最終日（本年9月24日）などとの兼ね合いを考慮しながら検討しています。内容につきましては、研究発表、パネルディスカッション、地域見学等、更には地域自治体との連携や特産品交流と内容のあるイベントにしていきたいと考えております。安曇野の９月は、収穫のときであります。米、リンゴ、なし、ブドウ、そば、ワサビ…など、安曇続の先人たちが、苦労して拓いた安曇野の地に豊かに実ります。一年後の来年はぜひとも万障繰り合わせて、皆様と「安曇野の地」において再会ができますよう祈念しております。

今回「古代海人サミット」に参加させていただき、このような機会をいただきました事に感謝し、来年の「安曇族サミット」への勧誘の挨拶とさせていただきます。

第一回交流会に感じたこと …… 平瀬孝子

安曇野市に転居して間もない上に、この会に入会して間もなく、安曇族についても勉強の足りない私は右往左往するばかりで、一会員のたわ言と思っていただきたいと最初にお断りしておきます。第一回交流会といわれても喉元過ぎればなんとやら、あの暑さも何所へやらという訳で思い出すままに書いてみます。

あの朝、好意ある軽トラの持ち主と二人、お安いお茶を求めて走り、店の好意の氷でやっと冷たいお茶に有りつきました。汗だくでしたがこんな微々たる事でも協力できて良かったと思ったのですが、交流会に関わった全ての方の好意と労力と能(脳)力で成り立っていると感じ頭が下がりました。受付の手伝いをしていた私は、会場に出たり入ったりでお話の内容については語れませんが、短時間の割に話す方が多くて少数の方のじっくりしたお話が聞きたかったと思います。二回三回と続くならば順番にお話いただけば良いのではないか。又、テーマを「なぜ、いつ、どこから」の一つに絞って、今回は「なぜ」、次回は「いつ」、と皆さん同じ内容で話していただくというのはどうでしょうか。そうすると私如き初心者には解り易いかと思います。

また、志賀島に参加してみて思ったことは、当日の資料の必要性です。もっと早く準備を始めて事前に話す方の内容を入れ、広告も載せたレジュメがあればもっと良かったと思います。

もうひとつ、当日会員の方々の参加が以外に少なかったようです。もっと大勢の方が参加しやすい方法はないものか。会員の皆さんの盛り上がりをどうしたら鼓舞できるのでしょうか。もっと会員を増やせないものか、どこが魅力にかけるのか。せめて千人位の会員がほしいものです。今更ですが、年間千円の会費に合った活動で良かったなと思うこの頃です。

ただただ安曇族について勉強したくて入会した私には、シンポジウムもましてや安曇野の観光の宣伝の一端まで担おうとは想像外で、会の名前と遠い処に力が入っているようで正直少々荷が重くなってきました。有明の宮城で生まれたというだけで、何か縁がありそうと興味を持ち、これからもっと勉強したいと思っています。この会のますますの発展を祈念いたします。（会員）

「金印シンポジウムin志賀島」に参加して …… 津留芳子

私の「金印シンポジウムin志賀島」はまず金印と対面することから始まりました。早朝安曇野を出発した総勢18名は、ガラスケースに納められた金印と対面。なるほど小さい。しかし、この小さな印には古代人が行っていたであろう中国大陸や朝鮮半島との交易の歴史が詰まっていると思うと、二千年前のモノとは思えない輝きを放って迫ってくるものがありました。

翌日のシンポジウムは、多少のヤジがあった中でも、コーディネーターの方の適切な進行によってテンポ良く進み、午前中の２人の先生の基調講演、午後のパネラーの皆さんの意見発表等を興味深く聞くことができました。高倉先生の金印の読み方に３通りの説があること。対馬の永富さんの海神を祀った海民文化の話。この中に住吉神社という名詞も出てき、三郷にも住吉神社があることを思うとやはり安曇野は海民族が渡ってきたのかと妙に納得してしまいました。

ある本に志賀海神社と住吉神社は兄弟神社と書かれているのですが、三郷の住吉神社が関係あるかはわかりませんが、身近な名前が出てきますと、たちまち親近感を持って話が近づいて来てしまいます。

この後もっと親近感を持った話が出てきました。パネラーのお一人、「有明海の阿曇族」と題されて大川市風浪宮の阿曇宮司さんが風浪宮についてお話されたのですが、その中に思いもよらず私の名字が突然出てきたのです。

風浪宮は風浪将とも言われており、その出自が唐の時代の大唐の津留サン。エッ……!!　そこで頭を掠めたのは、わが遠い祖先もその時一緒に大陸から渡って来て大川の近くの八女に落ち着き、故郷の津留を名のったのではないかと、勝手なストーリーを組み立ててしまったのです。（但し、後日資料を送って戴きましたところ、全く関係がないことが判りました。）

海の民の安曇族が志賀島から多くの地に散らばる過程には他の氏族との絡みがあったであろうから、安曇族の「なぜ」を探ることは他の氏族のルーツを探ることに繋がる。線から面に拡がる。しかも定説化されていないからこそいろいろな想像をめぐらせる事ができる。これがロマンというのでしょうか？

ただ、付け焼き刃的な知識で参加した私はもう少し勉強していたならば、折角の講師やパネラーの方々の話、質問された方の意見をもう少しおもしろく聞けたのではないかと反省しつつ、しなの19号に揺られて安曇野に戻ってきました。（会員）

安曇族の辿った道は東海ルートか、日本海ルートか …… 金井 恂

安曇族は古代においては有力な氏族であった。持統天皇の西暦691年に、古代から続く18の有力氏族の中に選ばれている。しかしその実像はあいまいであり、多くの謎に包まれている。そもそも「阿曇」と名乗ったのが何時の時代かもあいまいである。

私たち安曇人にとっては、安曇族がいつ、どこから、なぜやってきたのかということが興味深い謎である。安曇族が安曇平へ進出した時代については弥生時代説と古墳時代末期(6世紀末)説がある。弥生時代説は大場博士、宮地博士、一志博士たちが主張したものである。私は、安曇平に稲作文化が入りそして開拓されてきた経緯から、この説が妥当なものと考える。とはいえ、この場合でも東海地方から伊那谷経由でやってきたとする説と新潟の方から糸魚川経由でやってきたとする説に分れる。ここではこの進出ルートについて少し述べてみたい。

まず東海ルート説についてみる。考古学資料に基づくと弥生人たちは弥生時代中期前半に伊那谷を経由して信濃国へ進出してきた。すると当然のこととして安曇族もその流れの中に混じっていたと考えられる。東海地方の渥美半島には「阿租の磯」や安曇族の古墳と考えられるものがある。さらに蒲郡市には赤日子神社があり、安曇氏が「海神綿積豊玉彦神」(綿津見命三神と同じ)を祀っていたとされている。これ以外にも東海地域には安曇族の痕跡が多数残っている。つまり安曇族が瀬戸内海を東進し大阪・奈良・伊勢を経由し東海地域に定着し勢力を蓄えていたことが分かる。東海ルート説は有力である。

つぎに日本海ルート説についてみると、残念ながら新潟地域にはいまのところ安曇族の痕跡が見つかっていない。日本海側における足跡を辿ってみると、山陰地域の日本海側では「弥生の土笛」が多数出土している。土笛は中国の陶塤(とうけん)がそのルーツとされ、祭祀に使われていた。この地域の弥生時代前期に居住していた氏族の特徴である。ところが北九州では宗像市で1個出土しているのみで、他にはない。このことから山陰地域の人々は、北九州地域の弥生氏族とは異なる氏族だったと考えられる。つまり安曇族との関連を見つけることはできない。しかし山陰地域にはかつて安曇郷が存在していたことの記録が多数あり、安曇族の存在を示している。多分、安曇族は弥生時代前期末ころに土笛の氏族を駆逐して進出したと思われる。

播磨国風土記によると、安曇連太牟(たむ)が島根県石見地域の農耕者を兵庫県揖保郡石海里(現在の太子町地域)に連れてきて、その地域を開拓した。このことから山陰の石見地域は安曇族の勢力範囲だったと推測できる。

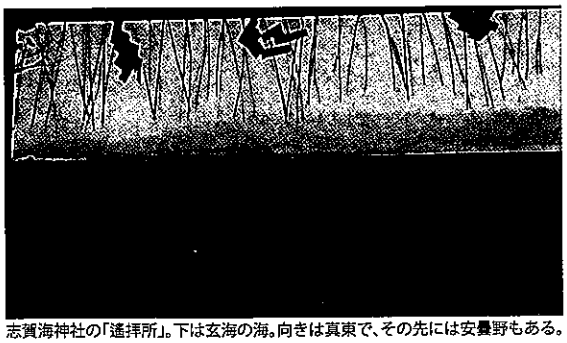
滋賀県高島市安曇川(あどがわ)町地域では、弥生時代から古墳時代にかけて安曇族が定住し勢力を張っていた。しかし、その後三尾氏に駆逐され、消えてしまった。この地域の安曇族は、やはり日本海側若狭湾の小浜地域から進出してきたと考えられる。日本海ルートでは、こうして若狭湾までは安曇族の足跡を辿ることができるのであるが、それから東はいまのところ不明である。

私たちはいま安曇族ゆかりの地と交流を始めており、その地の歴史情報を吸収しつつある。今後さらにより多くのゆかりの地と交流を広げ、より広い範囲にわたって安曇族の足跡を調べることが大事であり、それらを一冊の本に編集したいものであ。それらの歴史情報を比較研究することによって安曇族の謎を解き明かすヒントがでてくると考えている。　(会長)

安曇族こぼれ話―③

海から来た安曇族 …… 細川 修

「これが、アノ海ってもんか…」―私が初めて海を見たのは、小学校6年の春。新潟鯨波(くじらなみ)への修学旅行だった。梅雨明け前の、雨のそぼ降る海岸だったが、その時初めて踏んだ砂浜の感触は忘れられない…みやげは、浜のおばさんたちが宿まで売りにきた生イワシ。その年は信濃教育会の研究所に出向いていた父が、長野駅に出てくれたので、宿のおばさんと本人のおかずにホームで2本だけ分け渡し、残りを背負ってきた。あの頃の食糧事情とも重なって、今ではなんだかなつかしい遠い海の記憶である。


志賀海神社の「遥拝所」。下は玄海の海。向きは真東で、その先には安曇野もある。

いったい、ルーツをたどってみると、安曇族は海の民なのだという。しかも海の表から中、底までの統治すべてを神に委ねられ、制海権まで与えられて活躍した海の「雄族」だというのである…それがなぜ、山間の海なし盆地にたどり着き、拓き、生を刻んできたのだろうか。深いなぞである。そんな先達たちが、山国に飛び込んできたはるかなる海の特産品が、「イゴ(エゴ)」。

「エゴ草をさらした水の色は、深い海の底の色に見えます…」というのは、坂本博信州大学名誉教授。ご夫妻ともに北九州の出身で、北安曇郡池田町に住み着かれて長いが、ふるさとでおなじみだった「オキュート」が「イゴ」と呼ばれて安曇野にも定着していることに驚いたという。海の匂いがさっぱりと残った、海藻の練り食品だ。

原料「エゴのり」は、特別な属性を持っている。根は海底の土から直接生えずに、ホンダワラ類などに着生して成長する。いわば寄生木(やどりぎ)のような珍しい海草だという。だから「イゴ」は、安曇野では単なる食料品ではない。まず神仏に供えてからそのお下がりをいただく、いわば依代(よりしろ)の役を負う。盆や祭りなどハレの日の供物と考えられているが、そんな特性を持つ海草に先人たちは、海の祖神を宿らせていたのではないかと思ってみたりする。安曇族の遠い海路の無事と新地での幸せに願をかけ背負ってきた、海の神の「おまもり」と考えたいのだが、行きすぎた妄想であろうか。いずれにしろこの小さな海の草にも、ここに山住みを決めた遠い先達たちの海への一途なあこがれがこめられている。やはり安曇族の重要な転換は、海からもたらされたものであることだけは確かなようである。　(副会長)

明科地域の遺跡・古墳の現地見学会に参加して …… 千国 寛一

昨年９月19日、明科地域の遺跡・古墳を巡る勉強会に参加しました。安曇野市教育委員会学校教育課長の大澤慶哲氏を講師にお迎えしました。

今回は弥生時代の「ほうろく屋敷遺跡」、「みどりヶ丘遺跡」と古墳時代の「潮神明宮前遺跡」、「上手屋敷遺跡」のほか、明科廃寺址や桜坂古窯址を見学しました。

出発前に明科民族資料館で出土品の中に一体の人骨が展示されており、まずはドッキリ。この人骨は北村遺跡から出土した縄文時代後期の3500年前のものであり150体も発見されたと聞きさらにびっくりしました。

ほうろく屋敷遺跡では、弥生時代中期の再葬墓４群16基や、30個体の土器のほか住居址も１軒発掘されたとのことです。多量の石器と土器が出土したため、大きな集落があったとのことです。

潮神明宮前遺跡では、古墳時代の竪穴住居址３軒と古墳３基のほか祭祀用須恵器が数多く出土したそうです。

古墳時代後期の明科廃寺は、朱塗りの建物で現在の寺とは違い葬式をしたりする場所ではなく、単に権力者の権威誇示のためだったようです。建物の屋根に使われた瓦が多数発掘されましたが、中央部分がへこんでいる瓦でこれは全国的にも珍しいものであるとのことです。瓦は桜坂の窯で焼かれ、また、寺を支えた人たちは潮神明宮前に住んでおり、主だった人は古墳に手厚く葬られていたとのことです。

今回見学した遺跡の発掘場所は、現在、住宅や公共施設あるいは農地になっており、昔の面影が全く見当たらないことは残念でした。しかし、今回の勉強会で歴史ロマンに触れることができ、有意義な時間を過ごすことができました。次回の勉強会を楽しみにしております。

（会員）

明科フィールドワークの感想 …… 鈴岡 潤一

先日は見学会に参加させていただきありがとうございました。私にとっては初のフィールドワークでありながら、大変充実した見学会でした。特に明科廃寺の建立の背景、弥生時代の住居跡の未発掘の二点は大変興味深かったです。今回は本当にありがとうございました。

同じ土地の上でずっと生活してきたから遺跡が残っていないという話が印象的でした。遺跡のように形として見える歴史がなくても、人々が生きた歴史が連続しているのは素敵なことだと思いました。

今回明科で住居跡などを見て、安曇族の足跡を少し辿ることができました。一方、史跡巡りの中で遺跡が土地利用のため壊されてしまって見られなく残念に思います。今後私たちは、より多くの土地が必要となってくるなか、どのように歴史と向き合っていくのか。それが大切だと思いました。

（会員・松本深志高校地歴会顧問）

砂鉄を求めて安曇野へ ― ① シナノは鉄の先進地だった

小穴 岳夫

最近、安曇野への安曇族進出に関する本が何冊か出版された。現在の安曇野を見て、稲作適地と判断し、稲作文化を起こす為に、海から上陸した風に記されている。現在の安曇野が稲作の適地であることに異論はないが、縄文・弥生時代に適地と判断することは、あまりに事態を知らなすぎる。戦前の地元民に、今の状況は想像できなかった。たとえば千曲川の流域は、熔岩流・土石流地震などで、一時的に堰止め湖となり、水平な土質の平野が出来、水の便も良かったので、水田の適地となったのであり古代と同一視してはいけない。

■安曇野の自然を考察してみよう。

北アルプス山麓は複合扇状地で、大部分が石ころだらけの地で、松林になっていたと思われる。人が住みついた頃は、大きな川は流路定まらず近寄れず、沢水のある所を選んで、牧場を作るくらいだったと思う。住民が増えて、養蚕や天蚕が始まれば、桑畑や櫟(くぬぎ)林になり、戦後まで続いた。水の確保がむずかしいので、大きな発展はのぞめなかった。戦後、用水が得られた地は、養蚕・天蚕の代りに、リンゴ・野菜園などになった。松川流域は水はあるが、地盤が保水力のない砂礫地の為に戦前、粘土質の土を大量に客土し水田にしたが、冷水の為に生産量が望めず、現在は酒米を中心にしている。

一方、大きな河の周辺は、流路が大幅に変動し人の住める環境ではなかった。あちこちに、石ころだらけの用水路、盛り上がった自然堤防の地、洪水時の冠水による泥の厚く堆積した地、用水路に湧き水で出来た池、湿地やその水路が入り乱れ、一面に松、柳、雑木の自然林で、全く見透しの出来ない段差のある地であった。戦前でも、林は少なくなり、人も住んでいたが、地形は変わっていない。湧き水も、水位が低いので、かなり下流で、桑畑の中に自家用の水田があった程度である。

中央部は安定した平原であったが、水源が得られなく、今日でも人家の少ない地である。江戸時代、この地を何とかして水田にして食料を確保したい一念から、先覚者達が大規模な用水路(ここでは堰(せぎ)といい、自然の川と区別している。)を作った。1654年に矢原堰、1685年に勘左衛門堰、1816年に十ヶ堰が完成し、水田化が進んだ。

戦後、養蚕がすたれ、大部分が水田になった。一枚の水田の面積は小さく、大型農機具に対応する為に、一枚の水田の面積を大きくすること、用水路の改修、水田の段差を微少にすること等、農地の平均化が行われ、安曇野がこんなに平で、広かったのかと驚いた。古代に水田を作るとすれば、東部のフォッサマグナの地である。成立が新しいので、地質が軟らかで、沢水の量は少ないが急流の為に利用し易い。付記すれば、現在の仁科三湖以外に、安曇野に湖が出来た証拠は全くない。松本の蟻ヶ崎の辺は、梓川・奈良井川・女鳥羽川が合流していた時代があり、深い粘土層があるので、沼地だったかも知れない。

安曇族は、安曇野へ稲作の為に来たのではない。サケをとる為にきたのではない。

■鍵は鉄である。

清らかな湖沼・湿地などで、鉄分を含む水がバクテリアの働きで、水酸化鉄となり、葦・茅・薦などの水中部分を包むように沈殿付着する。現在は高師(たかし)小僧というが、往時は鳴石(なりわ)・鈴石(すずいし)といわれた。茎が消失した塊の中に、固定しない部分があれば揺すると音がする。これをスズと言った。

褐鉄鉱・沼鉄鉱といわれ、鉄分は50%程度で400℃位で軟らかになる。これを焼いて叩き、焼いては叩きすれば、不純物入りではあるが鉄が出来る。道具や剣などが作れる。縄文時代に伊勢の地に、南方から、鳴石を使った鉄の製法が伝えられ、五十鈴(いすず)川の名のある如く、鳴石があり鉄が出来た。伊勢神宮は鉄の神とは言わないが、一番大事な所となった。後々、良い刀があれば神社に奉納し、最も尊敬する神社とした。

日本でも、茅葺(かやぶ)きの小屋に住んで居た。古くなった茅は新しい茅に葺き替え、古い茅は焼いた。この際、残った灰の中に堅い団塊があるのを見て、鳴石の存在を知り、鉄を作った事が想像出来る。

その一番手は、諏訪地方である。湖沼・湿原があり、火山地帯・湿原地帯で、その水の中に鉄分が多く含まれるからである。御柱や青森の丸山遺跡などに見られる巨木の利用、稲作が行われたと思われることなど考慮して、鉄の利用は縄文中期頃に始められたとする意見が多い。中には縄文以前を説く人もいる。

鳴石は一度集めれば、次に集められるのに数年はかかる。これでは大発展はしない。

鳴石は神の力によると考えた。鳴石が湖畔の水潟(みなかた)から得られたので、鉄の神を南方(みなかた)神社と言った。祭神はタケミナカタの神である。これは諏訪神社の前身である。また、御柱の四本の柱の中では、南の柱が最も大事にされる。

製鉄時の温度が高い程、良い鉄が得られるので露天の場合でも、風の強い所が良い。諏訪神社は風の神でもある。御柱や、小谷(おたり)村の戸土(とど)の境の宮で薙鎌(なぎ)を木に打ち込む神事は、凪(なぎ)を願うことである。奈良の東大寺の五重の塔の九輪の部分に鎌が結びつけられている。以前に、忘れ鎌との設問があったが誤りである。五重の塔を作ったのが諏訪の人達で、巨大な柱と言い、諏訪の存在を示している。薙鎌も凪を願ったもので、今日まで健在である。(会員)

次号に続く。『砂鉄を求めて安曇野へ』は、2回連載で掲載します。

安曇の歴史と穂高神社 ― ②

山崎 佐喜治

■穂高神社は現在地に何時出来たか？

①神社に記録はないが、本殿奥の古い杉の切り株の年輪から800～850年前の創建と見て、1150年頃(平安末期)と想定される。しかし『日本三代実録』の859年(貞観元年)頃を現地創建の年と見れば、約300年の開き(空白)が出る。

②坂本博氏の説の様に、初め小さな氏神(産土神)のようにして、穂高の大門(安曇族商業発祥地＝未確定)の隅に祀られていたとすれば、そこから現地に移されたとも言える。

③鼠穴(松川村)にあったとか、宮城(安曇野市穂高有明)とか、牧(同穂高)地区にあったとする説もあるが確証はない。

④神社が現在所有する最古の文書は御造宮定日記。
1483年(文明15年)のものである。

⑤1669年(寛文9年)の「社家末改」(神職調査)に「安曇矢原庄穂高正一位大明神」の記載で返答しているが、祭神は不明。

■祭神・ご神体と社宝

◎穂高神社の祭神

①**新撰姓氏録** 815年(弘仁6年)万多親王・藤原緒嗣等
安曇宿祢（右京）穂高見命の末
安曇連　（河内）穂高見命の後　　安曇氏(安曇族)
凡海連　（右京）穂高見命の後

②**古事記**の記載712年(和銅5年)元明天皇・太安万侶
綿津見神は阿曇連らが祖神と以伊都久神なり。阿曇連らは綿津見神の子、宇都志日金拆命(穂高見命)の子孫なり。　いざなぎの神→綿津見命→穂高見命

③**日本書紀**の記載720年(養老4年)元明天皇・舎人親王
底筒男命・中筒男命・表筒男命はなり住吉大神なり。
※穂高見の表記はない。

④1681年（延宝9年）の記載
穂高神社両神主が京都・**吉田家への提出文書**
瓊々杵命(神道の根源に立つ神)、物ぐさ太郎(神社造営の創始者)とした。
※高島章貞、宮地直一博士とも、大衆のはやりに乗ったものと厳しく戒めた。

⑤1695年（元禄8年）
「**穂高三ノ宮**」(2人の神主の改書文)
本殿　瓊々杵命
左右2殿　天孫降臨に付き添った5部神
若宮　物ぐさ太郎
※民話の伝播力にあやかり、穂高神社をかなり有名にした。

⑥1724年(享保9年)**松本藩「信府統記」**
穂高神社縁起に坂上田村麻呂の魏石鬼退治(八面大王)を盛り込んだ。当時、軍事的色彩の物が好まれた。

⑦「信濃地名考」(1767年)「神祇宝典」(1794年)「特撰神名牒」(1876年以降)
※古い神社関係の記録簿または地誌で、穂高見命祭神で一貫していた。

⑧江戸時代1837年(天保8年)頃の善光寺道名所絵図の記載（高島章貞記）
三前中央　穂高見命
左　　殿　瓊々杵命
右　　殿　石姥女命
別　　宮　天照大神

⑨郷土史研究家の見解

■海神3神説(少童三神)
高島章貞(江戸時代の神社史研究家)1850年頃
上條助市(大正・昭和期の郷土史研究家)
海神4神説(少童三神＋穂高見命)
武田政太郎(穂高神社社司)「穂高神社考」1916年(大正4年)
※神社信仰は時代の変遷に応じ、その神徳、霊験の内容を変えた。

現在の祭神（穂高神社略記）海神2＋天孫降臨神1 三前中央 穂高見命　左殿 綿津見命　右殿 瓊々杵命 別宮 天照大神　若宮 安曇連比羅夫命　信濃中将物臭太郎

■神仏習合・神宮寺の併設

神宮寺は1328年創立の真言宗京都三宝院末寺で、1689年の文書には、薬師堂と仁王門の記載があり、本堂の記載はない。仁王像は、その後寛永～元禄年間に松本浅間の念仏寺に移転され、今は松本大村の玄光寺に現存する。

■ご神体と社宝

ご神体は遷宮祭毎に、3つの本殿(三前)から仮安殿に移され、又元に戻される。桐の箱に入った重い物だと云われているが定かでない。

社宝は、麻布と機織り機と鉄製の鋤鍬である。海神の租が陸に住み着き、この安曇の地を切り開いた事を物語っている。

■社殿の変遷

初期の頃の社殿の配列は、玉垣で囲われた今よりかなり狭い敷地であったようで、四隅に御柱が計4本たてられ、本宮、南宮、若宮の3つの社殿があり、これが「三宮穂高社御造宮定日記」の名の元になったと思われるものである。この時、南宮は排され、4本の柱も消える。江戸時代の中期以降は本殿が3つになり、本宮に合祀されていた三神は分散されて、今日のような三前が確認されている。

（会員）

次号に続く。『安曇の歴史と穂高神社』は、3回連載で掲載しています。

編集後記

歴史を学ぶことについて

去る7月24日には私達の主催する第1回安曇ゆかりの地との交流会が行なわれました。

また10月10日には九州志賀島において第4回の金印シンポジウム「金印と古代海人阿曇族」が開催されました。これには当会からも会員21名の方が参加されました。今回は参加団体も大幅に増え、内容も充実したものとなり会場は大変な熱気に包まれたとのことです。全国各地に安曇族研究の団体あるいは研究者が沢山おり、それぞれ各者各様に研究をされていることは誠に喜ばしいことでありまた励みにもなります。そこで私達はこれらの成果を受けとめながら私達の会の進め方と歴史を学ぶということについて改めて考えてみたいと思います。歴史とはそもそも何なのかということですが、歴史とは人間の本質を追求するものであるというのが今の歴史学会の考え方のようです。文献史料か物質資料にかたよらない人間科学的探究を目指すということです。心の科学と自然科学の連携ということでしょうか。歴史を成り立たせているものは①時間の観念、②時間を管理する技術、③文字で記録する技術、④ものごとの因果関係についての思想、といわれています。

これらのことを念頭において私達の歴史研究の基本は何かを考えると、私達の課題とするものが見えて来ると思います。それは一貫性のある明確な古代史像を描くことです。そして個々の事象を全体像とどう結合させるかということです。例えば今私達は安曇族に取り組んでいますが、考古学的にも文献資料上も事実が判明したとしても、それが古代史の全体像とどう結びつくかが論証されなければなりません。とりわけ当時の北九州の代表的国家である邪馬台国との関係はどうなのか。

その後の北九州はどうなったのか等々が問題となります。とはいえ私達は素人の集まりです。専門家のように文献、資料、記録等は手に入りません。そこで出会ったのが地元在住の坂本博先生(信州大学名誉教授)の講演録です(信濃安曇族の残骸を復元する)。先生は学問とは問いかけることだと云っています。そして自分の問いかけは自分で解けと。そして方法としては推論せよ(仮説を立てよ)と云っています。仮説を立てたら次は論証せよ、論証は首尾一貫して矛盾なく体系を構成していればよいとのことです。この方法により私達はいろいろな専門分野の学問的基礎の不足を乗り越え真実に迫ればよいわけです。

しかし問題はそう簡単ではありません。私達は学者、研究者と呼ばれる人達の著作から推論を重ねるわけですが、いくつかの壁があります。志賀島の金印について、何十年と論争の続く邪馬台国問題等々です。推論することにロマンがあるといえばそうでしょうが、私達のめざすものは歴史の真実です。ロマンにとどめておくわけにはいかないのです。私達素人は素人らしく方法をまちがえずに、出来るところから一つずつ成果を積み上げこれを一本の線につなげていく、そんな地道な作業が必要ではないでしょうか。

今日本は数々の外交課題を抱えておりますが、これら国際的問題の解決には確固たる歴史観が要求されます。その意味で歴史を学ぶということは大変大きな意義があります。先人の言葉を借りれば「歴史は人々のアイデンティティ(我々が何者であるかを示す証を与えてくれる拠り所)を形づくるものであり、精神的バックボーンとなるものである」と言えると思います。(本郷)

information

臨時総会を開催しました

本会の臨時総会が11月22日市民活動センターくるりん広場で開かれました。議題の主なものは交流事業の内容変更で、7月の第1回ゆかりの地との交流会以降企画運営委員会で検討されてきたものを承認することでした。総会冒頭の挨拶で会長は交流会の意義について、会の目的である市民レベルでの「安曇族のなぞ」を探るために必要であることを強調致しました。

変更の内容は、①当初5回を予定した交流会を2回とすること、②11月に予定した第2回交流会を明年2月開催とすること、③全国交流会を明年秋に開催することでした。変更の理由は第1回の反省を踏まえて内容をより充実させるためには準備期間がもっと長くかかることが挙げられました。

交流会の運営方法や実行委員会の編成についても数々の意見が出されましたが、これらを念頭に今後企画運営委員会で実施計画を策定することとしました。

最後に確認されたことは、全会員の協力なしには交流事業の開催はおぼつかないということでした。

事務局だより

●第1回「安曇ゆかりの地」交流会のために会員の皆さんが率先して、地元企業や協賛者へ広告や協賛のお願いに飛び廻っていただき50数社のご協力をいただくことができました。交流会報告書を郵送しお礼申し上げました。たいへんご苦労様でした。

●9月には　大澤慶哲(市教育委員会学校教育課長)さんに講師をお願いして40数名のメンバーで明科廃寺、上手屋敷遺跡等6か所を巡りました。

●2月実施の第2回安曇ゆかりの地交流会の実行委員会と、秋の第2回「あづみ・しか」全国交流会の準備会が開催され活動しています。会員の皆さんのご協力をお願いします。

●現在会員数は180名。会費未納の方は30数名います。事務局より納入のお願いをしますので納入方よろしくお願いします。

●会の勉強会の進め方、内容等について会員の皆さんの考えをお聞きしたいと思います。アンケートに、ご希望、ご意見等を記入して提出ください。

安曇誕生の系譜を探る会
会報発行：平成23年1月5日　事務局長 金井 透
〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛 1078-1 Tel.0263-77-2803
URL：www.azumitanjoh.or.jp E-mail：tooru.kanai@ab.wakwak.com

安曇之祖神 穂高神社
安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 http://www.hotakajinja.com
穂高人形飾物と道祖神展
資料館 御船会館 電話 0263-82-7310